１年道徳通信　第１６号

第１６回『エルマおばあさんからの「最後の贈りもの」』

第１６回目の道徳では、自らの死が近づいてもなお、日々を大切に自分らしく生きたエルマおばあさんとその家族との関わりから、「生きる」ということについて考えました。家族を思いやり、最後まで自分らしく生きたエルマおばあさんの姿から、生きることのすばらしさや命の尊厳について、みんな真剣に考えていましたね。

みんなの意見

エルマおばあさんが、みんなにくれた「最後の贈りもの」とは？

- 笑顔でいさせてくれたこと。（エルマおばあさんが笑顔で見送ってほしいと思っていたかもしれないから。）
- 嘆きや悔いではなく、たくさんの愛。
- 自分の最期が近くても、その最期までの自分の人生をしっかり生きていくこと。
- 死ぬことは悲しいことではないと教えてくれたこと。
- 楽しかった思い出。

「生きる」ということについて、思ったことや考えたこと

- 自分一人だけだったら生きていることが楽しくないと思うし、たとえ家族じゃなくて、友達だとしても、誰かと楽しく一緒にいることが「生きる」ことだと思う。
- “人と一緒にいること”“自分の人生を楽しく過ごすこと”
- 生き続けることが大切でなく、今を大事に最期まで生きることが大切だと思った。だから、自分も今を大切に悔いなく、エルマおばあさんのように生きたい。
- 自分の人生を最後までしっかり生きていくことが生きるということだと思った。
- 簡単に「死ね」とか「死にたい」とか思うのではなく、今生きていることに感謝することが大切だと思った。
- 自分の人生の中でも、嫌なことや悲しいことがあると思うけど、それを乗り越えて自分の人生を全うしていくことが、生きるということだと思う。
- 生きるということは、最期まで自分の人生を楽しんで、最期まで一生懸命に人生を楽しむことだと思う。

みんなは自分の人生をどう生きていきますか？